〈紀行文〉

幕末長州紀行

―二〇〇五年、広島・山口紀行（抄）―

伊東清風

はじめに

二〇〇五年夏の歴史教育者協議会全国大会は初めて広島で開催された。現地見学を岩国コースに選び、山口県に入ることにした。終了後、ついでに県内を回ることにし、山口、下関、萩にそれぞれインターネットを利用して安い宿を取った。ここでは幕末期に関連の深い下関と萩での行動を紹介させて頂きたいと思う。

下関と奇兵隊

八月三日（水）

昼食は山口駅に近いインド料理「シバ」のカレーで軽く済ませ、午後一時二九分発の新山口行きで山口を後にする。駅の売店に「薩長同盟」という駅弁の幟が出ていて気になったが、残念ながら現物はなかった。新山口を二時二三分発の山陽本線で下関に向かう。駅前の下関東急インに荷物を置き、四時頃からまず駅周辺の散策に入る。

下関駅を抜ける道路は東から来るのが国道九号線で、その先が国道一九一号線となっている。この道路を越えるにもまた地下道。国道に沿ってしばらく西に進むと、中国電力の前に白石正一郎旧宅跡があった。「高杉晋作奇兵隊結成の地」の碑もあり、一八六三（文久三）年六月、廻船問屋小倉屋を営む白石正一郎（一八一二・三・七～八〇・八・三一）が高杉らに資金面でも協力し、自らも隊士となった。奇兵隊は武士・町人・百姓の身分を越えた近代的軍隊の先駆をなす草莽隊の代表として活躍する。当時は海に面した浜門があって、志士らが出入りした。都落ちした七卿も滞在しているという。白石は高杉の死後、赤間神宮の宮司となり生涯を終えたという。

国道が北に折れる辺りを反対側に渡って、路地を二本入った奥の民家の庭先にひょうたん井戸がある。長府藩士に命をねらわれた高杉が、丸一日、井戸の中に身を隠して難を逃れたと言うが…。

国道を再び反対側に渡り、厳島神社に通じる斜めの路地を進んでいくと、小田海僊宅跡を越して、高杉晋作終焉の地がある。第二次長州征伐に対して、小倉口の戦いまでは肺結核を押して陣頭指揮に当たったが、遂に倒れ療養の甲斐もなく、一八六七（慶応三）年四月一四日、この新地町林算九郎の離れで息を引き取った。二七歳八ヶ月という惜しまれる命であった。

国道に戻り北へ進むと、右手に了円寺がある。第一次長征に無条件降伏した藩首脳部を俗論派と呼んで、一八六四（元治元）年、長府功山寺に挙兵した高杉ら正義派が新地の会所を襲撃した後、立て籠もった寺で、本堂には当時の刀傷が残るという。山門前の階段の脇には「丘道徹師胸像」が建つ。丘（一八五九・七～一九四六・一）はこの寺に生まれ、若い頃から非行犯罪問題に関心を持ち、青少年の不良化防止運動に尽力した。刑務所の教誨師ともなり、受刑者の教化に務め、一八九〇（明治二三）年九月に免囚保護団体下関保護院を創立。寺院境内に保護寮を建設し、更正運動に努めたという。一九九五年一月一二日の建立。

桜山神社は線路側の丘の上だろうと、入口まで戻らず、適当に小径を登っていくと、多くの墓標が並ぶ一画の裏側に出る。高杉晋作の発案で、一八六三年五月一〇日から始まった下関攘夷戦争で戦死した奇兵隊士らを祀る目的で、翌年一月に創建された。社殿は一八

六五（慶応元）年八月に造営され、招魂社としては我が国最初のものともいう。言わば靖国神社の前身、長州版だ。のち禁門の変や戊辰戦争での戦死者、果ては山県有朋など動乱を生き残った関係者も祀られ、三九六柱となっている。山口の古本屋に入った時、この日、下関で高杉晋作の歌碑が除幕されたとのニュースが流れていた。どこに建てられたかは聞き逃したが、前に回ってみると、できたばかりと思われる遺詠碑が存在していた。巻紙を象ったような碑面には、次の歌が書かれていた。

猛烈奇兵何所志
要将一死報邦家
尤欣名遂功成後
共作弔魂場上花

猛烈の奇兵何の志す所ぞ
一死を将って邦家に報いんと要す
尤も欣ぶ名を遂げ功成りて後
共に弔魂場上の花と作らんを

弔らわる人に入るべき身なりしに　弔う人となるぞはずかし

建てたのは、桜山神社改修事業実行委員会で、名誉会長に山縣睦子の名があった。社殿の前には明治天皇が行幸に際して金幣を賜与してくれたことを示す記念碑があり、入口の石段側に、この日、植えられたばかりであろう山縣睦子さんによる植樹も見られた。石段下には「七卿史跡」の碑も建つ。

厳島神社付近に戻り、萩藩会所跡を探す。観光案内の地図では所在地が分かり難く、いい加減迷ったが、何のことはない、神社の入口隣にその碑は建っていた。反対側には「焼肉ビビンバ　晋作」という店の看板が目立つ。厳島神社は、壇之浦の合戦後、海岸に漂着した平家一門が宮島の厳島神社の分霊を守護神として祀っていたというその神霊を祀って、一一八五（寿永四）年に社殿を創建したものという。境内には一八六六（慶応二）年八月一日に陥落・焼失した小倉城の余燼の中から戦利品として分捕ってきた大太鼓が鐘楼のようにして保存されていた。

観光案内のコースには含まれていないが桜山神社の線路を挟んだ向かい側に「高杉晋作療養の地」があったので行ってみることにする。山陽本線の高架下を抜け、線路と並行して走る道をしばらく北に進むと上り坂となる。上り切ったところに神田小学校があって、路地を左に入った突き当たりがそれらしいのだが何もない。諦めて、上ってきた道路に並行する細い道を下りかけると右手にその碑を見つけることができた。この辺りに桜山神社の駐車場もあり、線路が桜山を切り通して敷設されたであろうことが想像される。

駅方面に戻り、左に折れると大歳神社がある。一一八六（文治二）年に創建された神社で、源義経が彦島に陣を張る平家に対し、戦勝祈願をして矢を放った有明山の地に、漁民たちが祠を祀ったのが始まりという。大鳥居は一八六二年に攘夷必勝を祈願して白石正一郎が寄進したもの。翌年、奇兵隊の旗揚げの時には、高杉がその旗を奉納したという。

最後に日和山公園の高杉晋作像を目指して東へと向かう。途中、「港が見える丘の小径」という案内が目に入り、その矢印に沿って丘を登る。かなり急な石段が続き、登りきると確かに港の眺めは抜群の高台に出た。しかし目当ての像などどこにもなく、さらに下ってもう一度登らなければならないことが分かった。東光寺から登っていくルートが続いていたが、既に歩き疲れてこれ以上、山登りをする元気は無かったので、続きは翌日に回すこととする。

その足で唐戸桟橋に向かい、六時発の関門連絡船で関門海峡を渡り、対岸の門司港へ。約五分で到着、三九〇円。旧門司税関や国際友好記念図書館などの建物を眺め、関門トンネル人道入口へ向かう。途中、門司関跡、ノーフォーク広場、和布刈神社などがあった。

関門国道トンネルは一九五八年三月に開通。全長三四六一・四メートル。歩行者用海底トンネルは約七八〇メートル。エレベーターで地下に降り、十五分弱で歩き切れる。ランニングで往復しているグループもあった。歩行者は無料だが、自転車と原付は二〇円必要らしい。

御裳川側の入口に出ると、関門隧道建設の碑がある。一九三九年に試掘が開始され、戦争による休止を挟み、一九五八年三月九日開通とある。国道九号線を渡り、海岸側には前年リニューアルオープ

ンした壇之浦古戦場跡「みもすそ川公園」がある。源義経・平知盛像は一二月一二日に完成しており、除幕式に参加したNHK大河ドラマ『義経』で義経を演じる滝沢秀明と建礼門院徳子役の中越典子の手形が設置されている。また幕末の下関戦争で外国船を砲撃した砲台跡でもあり、長州砲が四基ほど据えられていた。

赤間神社辺りまで歩いて食事をする店を探そうと思ったが、通りには何もなく、断念。壇之浦で下関駅行きのバスに乗車、七時一四分。駅で下車し、車窓から目に入ったふぐの大きな赤提灯に誘われ、「千彩」という店に入る。「ちどり」と読むそうで、若主人が母親から受け継いで、二代目という。

八月四日（木）

八時一〇分、ホテルを出て、昨夕、断念した日和山公園に向かう。「晋作通り」という高杉の胸像がある辺りから登っていくと公園に出る。大きな高杉の像が関門海峡を見張るように下関の町を見下ろしている。観光案内の中には「胸像」となっているものもあるが、立派な全身の立像である。近くに「重山禎助　吉村藤舟　両先覚顕彰碑」がある。地元の歴史学者のようだ。公園内には他にもいくつかの石碑類が見られたが、最も目を引いたのは、関釜連絡船崑崙丸（七八〇〇トン）の慰霊碑である。一九四三年一〇月四日二時五分、下関を発って釜山に向かった崑崙丸は、五日一時二〇分、沖島北東一〇海里で潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没したという。一九六〇年一〇月に建立された碑には、「崑崙丸」の名が入った浮き輪も造形されている。

公園から東に道をとって降りていくと光明寺に出る。一八六三年、幕府の攘夷決定を受けて、京から戻った久坂玄瑞らが寄宿した寺で、彼らは「光明寺党」と呼ばれ、五月一〇日からの外国船砲撃事件で活躍した。後に「奇兵隊」となるグループの結成であった。本堂の右手に細長い「慰霊塔」が建てられていた。

唐戸方面にしばらく進むと、左手に古い洋風建築物がある。山口銀行別館とあり、今は使われていないようだ。一九二〇（大正九）年、三井銀行下関支店として創建された。設計は長野宇平治、竹中工務店施工とある。一九三三年四月、百十銀行本店、さらに一九四四年四月から一九六五年五月まで山口銀行本店として利用されていた。

寿公園には近年、注目されている金子みすゞの顕彰碑がある。観光用に「金子みすゞ詩の小径」という文学散歩のコースが整備され、パンフレットも作られている。みすゞ（本名テル）は一九〇三（明治三六）年に長門市に生まれ、一九二三（大正一二）年、この地の上山文英堂本店に来住し、市役所の近くにあった商品館内の同支店で働きながら創作活動を行った童謡詩人。一九三〇年、二六歳で亡くなった。公園の隣、ふく料理「川喜多」の店先には、名水「名池の井戸水」がある。

下関市役所から唐戸商店街を抜け、国道に掛かる歩道橋に上ると、一九〇〇（明治三三）年建造の下関最古の洋風建築かつ国内最古の現役局舎という南部町郵便局、一九一五（大正四）年に建造された西日本初の鉄筋コンクリートビルという旧秋田商会ビル、振り返って旧下関英国領事館を眺めることができる。英国領事館は一九〇六（明治三九）年に建てられた、赤レンガ造りのバロック様式の建物で、一九四一年まで使用されたという。

国道からも「世界一のふくの像」が見られる亀山八幡宮の場所には砲台が築かれ、下関戦争などの舞台ともなった。鳥居の脇には「山陽道の基点　九州渡航の起地なり　山陽道第一番塚なり」と刻んだ碑や床屋発祥の地碑がある。

下関の東の本陣伊藤邸跡を越えると、春帆楼が坂の上に見えてくる。坂を上って入口右手に、一九三七（昭和一二）年六月に開館した日清講和記念館がある。一八九五（明治二八）年春、日清戦争の講和会議が春帆楼で行われたことを記念して、その時に使用された家具類や関連資料が展示され、講和会議の部屋も復原されている。外には伊藤博文首相・陸奥宗光外相の胸像が建つ。

春帆楼の地は、もと隣の赤間神宮の前身である阿弥陀寺の境内で

あった。一八六八（慶応四）年三月から神仏分離が命ぜられ、阿弥陀寺が廃寺となり、その方丈跡を眼科医藤野玄洋が買い取って開業した。一八七一年に玄洋が亡くなると、妻ミチは割烹を兼ねた旅館に改造。彼女は幕末の志士たちと交流があり、明治の高官らが立ち寄るようになったという。三棟の建物に月波楼・春帆楼・風月楼と命名したのは伊藤博文であった。看板の揮毫も伊藤のものである。一八八七年の暮れに伊藤がふらりとやってきた時に、あいにくの大時化で漁が無く、困った女将は禁制のふく料理を出してしまった。以前からふくの味を知っていた伊藤はその美味を絶賛。翌年、禁令を解いたという。ふく料理公許第一号の店ということで、入口にふくの像も建っている。ふく食の禁止令は豊臣秀吉による古いものというが、一八八二（明治一五）年の「違警罪即決令」でも「河豚食ふは拘留科料に処す」とされていた。しかし庶民は昔から手料理で食べていたという。

春帆楼から西に向け李鴻章道と呼ばれる小径がある。一度、暴漢に襲撃された李鴻章は、宿所であった引接寺との往復に、この小径を使うようになったという。今は藤原義江記念館となっている紅葉館までで行き止まり。その先の引接寺へは、いったん下へ降りないといけないようになってしまったようだ。

赤間神宮の左手には、一一八五（寿永四）年の壇之浦の戦いで平家と共に滅んだ安徳天皇陵がある。竜宮城を思わせる中央の水天門は戦後の建設という。宝物館の裏に、平家一門の墓があり、七盛塚と呼ばれる。知盛・資盛など、盛の字が付く平家の公達七名だけが祀られているわけではなく、清経・教経や二位尼時子らの名前もあった。

バス停「赤間神宮前」には、平家物語の冒頭の一節を台座の石に刻んだ母子像があった。八歳の孫安徳天皇を抱いて入水した二位尼をイメージしているのであろうか。また海岸側の奥には「朝鮮通信使上陸淹留之地」という立派な碑も設けられていた。

バスを駅の一つ手前の「豊前田」で降り、一九九六年に誕生したという「海峡ゆめタワー」へ。ホテルにあった割引券で展望料金六〇〇円のところを四八〇円で。高さ一四三メートルの三〇階まで、エレベーターで七〇秒。三六〇度が見渡せ、前日歩いた桜山神社の方面、今朝の日和山から赤間神社のルートも確認できた。関門海峡に架かる関門橋、対岸の門司港、宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘が行われた巌流島（船島）、平家が陣を置いた彦島と一望して下に降りる。壇之浦の戦いを五分ほどで描いたドラマが作られており、常時、ビデオで上映されていた。

次の見学地萩へは、山陰本線による鈍行の乗り継ぎで行くしかなく、時間が掛かり本数も少ない。調べてみると、夕方、萩を見学する時間を作るには、下関を一一時五三分に出る列車に乗らなければならなかった。小串、長門市と二回、乗り換えて、ようやく東萩に着いたのは三時ちょっと前だった。車窓から外を眺めていて気になったのは、新しく建てられた家の屋根に、城の鯱のようなものが載っていることだ。昔の古い屋根には見られないので、近年の流行なのだろうか。

松陰神社を訪ねて

東萩駅に降りると、駅前に萩城天守閣のミニチュアが目に入る。萩市内へは地下道をとあるので、ひょっとしたら川の下に地下道が続いているのかとも思ったが、やはりそんなことはなく、松本川に沿う道路を越えるだけで、国道一九一号線が通る萩橋で渡らなければならなかった。予約したホテルオレンジは橋を渡った土原地区にある。少し歩かなければならないかと思い、川を越えた後もすぐに地下道に入って国道を渡り南に進んでいくと、左手にオレンジの駐車場が目に入る。不審に思って振り返ると、三階建ての小さなビルにレストランオレンジの看板が見えた。もう少し高いビルを想像していたのだが、先の方を見てもそれらしい建物は見られない。多分城下町地区には規制が入っているのであろう。慌てて引き返しチェ

ックイン。

駅に戻り、レンタサイクルを借りる。翌日の同じ時間まで千円。三時半を少し回っていたようだ。自転車に乗るのは、二〇年ほど前、清水ヶ丘高校の歴史研究部の夏合宿で飛鳥地方を回って以来のことで、ちゃんと乗れるのか若干不安ではあった。

松本川に沿って松陰神社を目指して進んでいくと、右手に石碑群が目に入った。自転車を降りて確認してみると、「香川津二孝子の碑」というのが三つ並んでいた。萩郊外の椿東分に長七という六尺（駕籠かき）が住んでおり、その子に権蔵・利吉の兄弟がいた。一八一五（文化一二）年、末の妹を生んだ母が病床に伏し、その平癒祈願にと二人は、三〇町（約三・三キロ）離れた新堀の金毘羅社（現在の円政寺境内）まで毎日通うことにした。ところが一二月一一日の満願の日、あいにくの大雪に襲われ、帰途、松本川の川岸に倒れ亡くなってしまった。これを知った一〇代藩主毛利斉熙は翌年、明倫館学頭山県大華に命じ、「紀二孝子之事」という碑を香川津の医徳寺境内に建立させた。さらに一九一四（大正三）年、椿東青年会が二孝子の百年忌を営むに際し、碑が辺鄙な場所にあるため、新川の県道北側に移建して「移孝子碑記」も建立。別に一九三八（昭和一三）年、絶命の松本川東岸（多分現在地ということになろう）に「香川津二孝子絶命之処」の碑が建てられている。その後、一九六四年に県道付け替えがなされ、再び人目に付かなくなった前二者をここに移設したという。また少し離れたところには、明治前期の日本画家森寛斎（一八一四～九四）の誕生地の碑があった。円山派の画家で、幕末期には尊攘派志士らと交わり、支援したという。両者共に観光案内図には載っていなかった。

次にデジカメに残っていた碑は「薩長土連合密議之処」であったが、これも地図になく、松陰神社へ行く途中、川沿いか、あるいは神社の端にあったものと思われる。明治百年を記念して、一九六八年に建立され、字は当時の首相岸信介によって書かれている。「薩州田上藤七　長州久坂玄瑞　土州坂本龍馬」の三人が顔を合わせた「文久二年一月　鈴木勘蔵宿之跡」に建てられているようだ。解説には、久坂からの武市瑞山宛書簡に「諸侯も公卿も恃むに足らず、草莽の志士を糾合し、義挙の外にはとても策なし」とあり、松陰の「草莽崛起論」に通ずる内容を話し合ったとある。宮地佐一郎『龍馬百話』（文春文庫）によると、龍馬が武市の使者として初めて萩に入り、久坂を訪ねたのが一月一四日、たまたまその翌日、薩摩からは樺山三円の使者田中藤蔵がやってきており、「島津久光の上洛が報ぜられ、三藩の尊攘派の向かうべきところを、彼等は語り合ったはずである」としている。

松陰神社には「明治維新胎動之地」という碑があり、吉田松陰（一八三〇～五九）の幕末維新へ及ぼした影響が大きかったことを印象付けている。中に入っていくと植栽の中に、家族宛の遺書にあった辞世「親思ふこころにまさる親ごころ　けふの音づれ何ときくらん」を刻んだ石碑が見られる。その背後には「孝行竹」というのが植えられている。解説によると、これは蓬莱竹（漢名観音竹、孝順竹）といい、インドシナ原産で株張り竹の一種。横走地下茎が発達せず、横にはびこらず、親竹の周りでのみタケノコが育つことから、親を守る竹という意味で、松陰が親孝行で、竹を愛したという記録もあるので寄贈されたという。

松下村塾は謹慎中の松陰が近隣の若者たちを教授した場所であるが、以前からあったこの小舎を改修して八畳一間の教場としたのが、一八五七年一一月のこと。翌年三月、門人らの労役で十畳半を増築し、七月二〇日には藩から正式に家学教授が許可されているが、その年の一一月には、上洛する老中間部詮勝襲撃計画が発覚して、再び囚われの身となるので、実際にここで講義がなされたのは一年余という短期間であった。松下村塾の名称は、少年期に自らも学んだ叔父玉木文之進が主催していた塾名を継承したもので、松本村の松本を中国風に松下と表記したという。

松下村塾の奥が父杉百合之助の家で、野山獄に投ぜられていた松陰が一八五五（安政二）年一二月一五日から父に預けられて、その

幽室で「孟子」の講義を続けたという。松下村塾の舎屋が整うまでは、ここで門人を教えたのである。

松陰神社は一八九〇年に塾舎を改修し、杉家邸内に内社を営み祀ったのが始まりという。一九〇七年、松陰神社維持会総裁に侯爵伊藤博文、副総裁に子爵野村靖を立て、一〇月四日に県社として認められた。松陰遺墨展示館（観覧料二一〇円）、吉田松陰歴史館（入場料は普通六五〇円なのに、なぜか割引料金で六〇〇円）に入館。歴史館では蝋人形で松陰の生涯を紹介していた。

松陰神社の横を流れる月見川をたどってしばらく行くと、黄檗宗の護国山東光寺がある。三代藩主毛利吉就が一六九一（元禄四）年に創建した、毛利氏の菩提寺の一つという。ここから右手に折れ、なだらかな坂道を登っていくと吉田松陰の墓にたどり着くはずである。なだらかとは言っても、長い坂で、とても自転車をこいで上るわけには行かない。

松陰の墓を奥にして、その前に一族や門人らの墓石が並んでいる。刑死した松陰の墓を直後に建てることはできず、一九五九年一〇月二七日に杉家では刑死百年祭を行い、遺髪をこの団子岩墓地に葬ったという。そうした関係で松陰の墓は他の墓石と離れた場所に建てられたのであろうか。墓地の右手には明治維新百周年を記念して一九六八年に建立された松陰と金子重輔の銅像がある。一八五四（安政元）年、下田からペリーのアメリカ船で密航しようとした二人の姿を造形している。高さは約八メートル、題字は佐藤栄作首相、日展審査員長嶺武四郎の製作である。道路の反対側には「吉井勇歌碑」、「高杉晋作草庵跡地顕彰碑」もあった。

墓地の右手を一段降ったところが、「吉田松陰誕生地」だった。松陰は士録二十六石の杉家五代百合之助の二男として、この樹々亭山屋敷に生まれた。百合之助は盗賊改方頭役となって、一八五三（嘉永六）年に現在の松陰神社境内に移ったという。

ここからは降りとなるが、スピードが出て、ブレーキをかけるのが怖い。キーッというブレーキ音は心地良いものではない。

まず玉木文之進旧宅が目に留まる。「松下村塾発祥之所」という碑もあり、ここに、少年期の松陰が通っていたことが分かる。そのまま松陰神社の方へ向かうと、「吉田稔麿誕生地」がある。松下村塾四天王の一人で、池田屋事件で新選組に殺された人物であるが、あまり知られていないのか、観光案内には示されていない。伊藤博文旧宅に行くには、やや来すぎてしまったようで、少し戻って右に折れる。旧宅の奥の空き地には、寂しく博文の銅像が建っている。別邸は閉める作業に入っていたが、中に上げてもらい一巡。熊毛郡束荷村（現大和町）の農家に生まれた博文は、九歳の時、父十蔵と共に萩に出て、一八五四（安政元）年に父が中間伊藤家を継いだため、この地に移った。一四歳であった。一七歳の時に松陰の門人となっている。

松陰神社の前に戻り、萩市内に向かって行くと、松本大橋を渡る手前、左側に品川弥二郎誕生地がある。第二回総選挙で、政府による選挙干渉を指揮した内務大臣として知られる。

萩の町は阿武川が下流で松本川と橋本川に分かれ、その間の三角洲地帯に形成された城下町である。まずその三角洲の先端を回ることとする。国道は南に向かい、警察署の所で西に折れる。国道から分かれ直進すると、交差点の左側に長井雅楽旧宅跡がある。『航海遠略策』を以て、開国論を一時、藩論として京に上ったが、久坂ら攘夷派に反対されて切腹させられた。

山県有朋の生誕地を求めて進んでいたが、まだ萩の町の広さ、距離感がつかめず、観光案内の地図だけでは不安になって、川で野菜を洗っていたおばさんに尋ねてみると、この小さな川が藍場川で、もう少し先だろうということだった。やや行きつ戻りつしながらも一戸分の区画が空き地となっている所に、「元帥公爵山縣有朋誕生地」という立派な碑を見つけることができた。松陰に学び、奇兵隊の軍監を務め、明治政府では徴兵制を導入し、陸軍関係に大きな勢力を築いた、伊藤と並ぶ大政治家となる。橋本川側の上段の空き地には「厳島神社旧地之碑」が建っていた。

橋本川沿いに堤防の道をしばらく行くと（工事中で迂回しなければならない場所もあったが）三角洲の先端に着く。松本川を少し下ったところに藍場川の取水口があり、この藍場川に沿う道路をたどると、右手に旧湯川家屋敷がある。川沿いに長屋門がある武家屋敷で、屋敷には橋を渡って入る。川から水を引いて風呂や食器洗いの生活用水とした利用形態をとどめている。その先にあるのが桂太郎旧宅であった。

土原地区に戻り、警察署と松陰大橋を結ぶ道路の手前をふらふらすると、まず「奥平謙輔誕生地」があった。前原一誠らと萩の乱を起こした人物である。さらに少し離れた所には、「白根多助・白根専一旧宅地」がある。多助は埼玉県令などを務め、その子専一は明倫館、慶應義塾に学び、やはり内務官僚として活躍した。

道路を渡り、松陰大橋寄りの路地を入ると、奥平家長屋門がある。その反対側に伸びる道路の北側が「周布政之助旧宅地」、南側に入江九一と野村靖兄弟の生誕地があった。少し離れた所に見た井上勝旧宅跡の門の屋根は手入れがなされず傾いていた。

松本橋に通じる道路を渡り、次の一画に入ると、小川家長屋門がある。入口には不気味な小川勝兵衛の武者人形が置いてあった。北へ進むと、松下村塾に学んだ楢崎弥八郎の旧宅地跡もあるが、今は公園になっている。最後は、ホテルの近くの前原一誠旧宅を訪ねて、六時三〇分にホテルへ戻る。

夕食は交差点を挟んでホテルのはす向かいにあった「萩心海」という海鮮料理屋に入る。店内には大きな生け簀が設けられており、注文を受けて中に泳いでいるのを網ですくって調理してくれる。値段は刺身一品で二千円以上と高めであったため、刺し盛の手頃の値段のを注文する。結構量があり、地ビールと地酒でいい心持ちになっていると、隣の御夫婦が注文された、多分、ケンサキイカであろう天ぷらを残しそうだからと、お裾分けしてくれた。さらに奥にいた店のご主人らしい方が、日本海のシャコだけどどうですかと、サービスして出してくれ、自分はこれで帰ると言って出て行かれた。結局、天ぷらは食べきれず、満腹して店を後にする。

萩城下町をめぐる

八月五日（金）

八時一〇分にホテルを出て、いよいよ萩城下町の中心部へと向かう。

今は跡地の碑しかないが、野山獄には松陰が捕らえられており、隣接する岩倉獄には金子重輔が入れられ獄死した。一六四五（正保二）年、岩倉孫兵衛（八郎兵衛）が酒によって、向かいの野山六右衛門の屋敷に押し入り、その家族を殺害した。藩は両家を没収し、野山獄を上牢、岩倉獄を下牢とした。上牢には士分以上の者が収容されるが、金子が岩倉獄に投ぜられたのは身分が低かったためである。

北に進むと旧萩藩御船蔵がある。今は埋め立てられてしまっているが、かつては松本川に接しており、船が出入りできた。一六〇四（慶長九）年、藩主の御座船を収納するために建てられたという。ここから西に向かい、住吉神社を過ぎて、海岸に近付くと、「女台（おなご）場」とも呼ばれる菊ヶ浜土塁に出る。一八六三（文久三）年五月一〇日、下関で外国船への砲撃が始められたが、結果は外国軍の反撃を受け、思わしくない。浜崎町の住民が土塁の築造を請願するなど、住民の手で萩を守ろうという気運が高まったという。身分を問わず、男女揃っての作業がなされ、武士の妻女や城内の奥女中までが派手な衣装で参加したという。

外堀を北の総門跡から渡ると、益田親施（右衛門介）旧宅地、旧周布家長屋門などの武家屋敷の風情を残す通りが続く。

萩疎水（堀内運河）を渡り、二の丸跡から内堀を指月橋で渡ると、指月公園正面受付がある。入園料は旧厚狭毛利家萩屋敷長屋と共通で二一〇円。公園内も自転車通行可であった。萩城は関ヶ原の戦いで敗軍の将となり、領地を長門・周防の二ヶ国に削減された毛利輝

元によって、一六〇四年から四年の歳月をかけて完成した指月山頂に要害としての詰丸を持つ平山城で、指月城とも呼ばれる。

本丸跡を抜けると、正面に志都岐山神社がある。一八七八（明治一一）年に、山口の豊栄神社（祭神毛利元就）・野田神社（祭神毛利敬親）の遙拝所として、萩近在の有志が創建したものという。右手奥には池を中心とした東園があり、二代藩主綱広は園内に稲田を設け、自ら耕したという。

志都岐山神社の前の休憩所の周辺には、藩校明倫館の万歳橋、旧福原家書院と旧梨羽家茶室、花江茶亭が移設されている。花江茶亭はもと藩主別邸にあったもので、現在は有料で茶を点ててもらえるようだ。公園の南西隅に天守閣跡がある。

二の丸を抜けて南門に出ると、毛利輝元の座像がある。その前に大きな駐車場が広がり、道路を渡った所に、厚狭毛利家萩屋敷長屋が見える。現存する萩の武家屋敷では最大のものという。駐車場の奥には萩史料館がある。入館料五〇〇円。古くからの史料館のようで、文書類や武具などが整然と展示されていた。一台だけ据えられていた大きなクーラーの前が涼しく、じっくり展示品を眺めていると、高杉晋作らの指名手配書が目に入った。幕府が木版刷りで配布したもののようで、宛所の五人組の部分だけ手書きできるようになっている。人相書付きの手配書には「長門産風者高杉晋作　筑前産風者平野次郎　薩摩産風者西郷吉之助」などと、「風者」という脱藩浪人と分かるような呼称が用いられている。

次に萩キリシタン殉教者記念公園を探したが、分かり難く何度も同じ場所を行き来させられた。史料館の裏手に当たるのだろうか、萩藩重臣の私塾「徳養館」の門というのを見つける。三九六七石の佐世氏が村民教育の目的で、明和期に文武両道を学ぶ場として設けたという。奇兵隊を生む風土が早くから培われていたのだろうか。ようやく見つけた公園は、かなり大きな敷地を持っていた。萩には隠れキリシタン関係の遺跡が結構あるようだ。萩疎水を渡る手前の一画が、秀吉の高松城攻めで知られる清水宗治の子孫の屋敷跡だったようで、幕末期には清水清太郎という青年が、周布政之助らと行動を共にし、一八六四年に二二歳で切腹させられている。

萩疎水を渡って、鍵曲（かいまがり）に行く手前に「江風山月書楼址」がある。川手御殿・花江別邸などとも呼ばれた藩主別邸の一つで、一八六八年に民有となっていたのを、茶室「花江茶亭」のみ、一八八九年に品川弥二郎らが買収して指月公園内に移築したという。

鍵曲は敵に攻められた時、迷路のような道に誘い込み、周囲の高い土塀から攻撃するための防衛施設である。口羽家住宅から続く部分は、当時の趣を伝える目的で舗装していない。鍵曲を出た突き当たりの家の敷地内は夏みかん畠になっていた。

もとの道を戻り、萩高校のグランドを右手に見てしばらく行くと、旧福原家萩屋敷門が建つ道路に出る。その道を進むと、左手に門田益田氏旧宅土塀が見事に長く十字路があり、そのはす向かいに「国司親相旧宅地」の碑だけが建っていた。第一次長州征伐を受け、禁門の変の責任を取らされて、切腹したのが福原越後・益田右衛門介・国司信濃の三家老であった。既に藩庁は山口に移り、こことは関係なかったと言えるが、益田・福原旧宅跡にあった説明板には、このことは触れられていなかった。ましてや国司の宅地跡には石柱のみ、となれば、多少なりとも幕末史に関心のある者としては、ちょっと説明不足なんじゃないのと言いたくなるのは、無理もなかろう。

堀内の東端中央部に、二〇〇四年一一月一一日に開館したばかりの萩博物館がある。そのまま進めば入口があったのだが、塀越しに建物の薄茶色い屋根が見えると、全体を見たくなり塀沿いに北側に回り込んでみる。できたばかりできれいさは感じられるが、残念ながら長い歴史の町萩にふさわしい重厚さがない。広い敷地なのに、裏口らしきものはなく、結局一回りさせられることとなった。東方正面から来ると、まず田中義一の立派な銅像が目に入る。これでは田中義一が萩を代表する第一の人物のような印象を受ける。

萩博物館の入館料は五〇〇円。常設の高杉晋作資料室では、松陰

門下の四天王の一人として、奇兵隊を創設するなど幕末期に活躍して、僅か二七歳八ヶ月でなくなった晋作の生涯を通じて、幕末の歴史を知ることができる。次の萩学展示室では、自然とともにある「まち」・今に息づく「まち」・人を育む「まち」の三つのテーマに沿って、萩の歴史や自然を学べるような展示がなされている。ふれあいコーナー的な「萩再発見ギャラリー」では「萩学なんでもBOX」というケースが棚に納められており、松下村塾や萩焼など関心のあるテーマを選んで、ケースに入った資料を自由に手に取ってみることができる。市民が資料を揃えてケースに入れることができる、市民参加型の博物館とも言えよう。企画展示室では萩市・下田市姉妹都市締結三十周年記念特別展「『宝島』の作者スティーブンスンがつづる吉田松陰伝」が行われていた。知らなかったことだが、松陰の伝記を初めて著したのは、なんとイギリスの作家だったという。一三歳の時、松下村塾に入った正木退蔵（この人も知らなかったが）が、維新後、留学生の監督として渡英し、エディンバラ大学のジェンキン教授宅でスティーブンスンに会うこととなる。正木から松陰の話を聞いて、感動したスティーブンスンは一八八〇年に「ヨシダ・トラジロウ」を発表する。展示ではさらに金子みすゞがからめられていた。

館内には「まち博カフェ」というレストランもあり、ここで昼食をとる。瀬付きアジ、タイ、ケンサキイカの刺身が乗った三旬丼というオリジナルを頂く。

博物館を出て、南に向かい、旧児玉家長屋門を通り、右に折れて、鍵曲のはずれが見える通りを中程まで来た所に、「旧明倫館址」があった。五代藩主吉元が士道の退廃を懸念して、一七一八（享保三）年にこの地に設立したという。堀内地区からは、左足元に誰にも気にされないであろう、雑草に埋もれた「平安古総門址」という小さな碑を確認して、平安橋を渡って、平安古地区に入る。

まず村田清風別宅跡。天保期の藩財政窮乏を救ったとされる人物である。近くに「久坂玄機誕生地」もあった。玄瑞の兄という。国道を渡って、信号を左に入ると「久坂玄瑞誕生地」がある。松下村塾四天王の一人で、高杉とともに双璧と称され、松陰の妹文を妻に迎えていたが、強硬な攘夷派で、禁門の変を指揮し、自害して果てた。この時、同じ四天王の入江九一も亡くなっている。

橋本川に近い所に、鍵曲が見られる。ここは堀内とは違って、舗装がされていた。

田中義一別邸には、近所の方がボランティアで常駐していて説明してくれる。江戸時代は毛利筑前の下屋敷だった場所で、平屋の一部には、当時の建物が残って、釘隠などにそれを偲ぶことができる。明治に入り、持ち主が変わったが、その都度、建て増しがなされ使いやすいようにされていったという。室内には田中の遺品や資料類も展示されている。軍服が目を引くが、一八〇センチの大男であったことが分かる。平屋部分の基礎を固めたのが、萩に夏みかん栽培を広めた小幡高政の時という。その後、田中義一が手に入れ、「五松閣」という二階屋の部分を付け足した。廊下には欅の一枚板、屋久杉に五松閣を外から眺めたと思われる景色を透かし彫りした欄間の細工など、諸所に贅がこらされている。川の方には現在、塀が巡らされているが、かつては何もなく、川の流れから、対岸の山々の景色が借景として楽しめたという。また船着き場も邸内に設けられており、米俵などを運び込んだり、人の出入りも可能だったようだ。

裏庭には、小幡高政の「橙園之記」碑がある。高政は貧窮に苦しむ萩士族の生活の助けにと、この地に夏みかんを植えて、これを特産品として普及するのに成功した。その発祥の地であることを後世に伝えるため、高政自らが、一八九〇（明治二三）年に建立したという。奥には柑橘類一〇種三七〇本のかんきつ公園が広がっている。

国道に戻り、北に向かうと、正面が市民球場で、その前の広間に馬に乗った軍人の像が見える。横断歩道を渡っていくと、それが山県有朋のものであることが分かる。少し西に進んで新堀川に架かる

慶安橋を渡ると、国指定史跡「萩城城下町」に入る。中には単独で文化財指定を受けているものもあるが、多くは一九六七年一月一〇日に町全体として指定されたようだ。手前から江戸屋横町、伊勢屋横町、菊屋横町と並ぶ。南側の慶安橋筋を奥まで進み、菊屋横町に入ると、中程左手に「高杉晋作誕生地」がある。「高杉春樹旧宅地」ともあるが、これは晋作の父小忠太のこと。少し北側の右手が「田中義一誕生地」。呉服町筋（御成道）に出ると、右側に菊屋家住宅がある。東に戻り、伊勢屋横町を越えて、次の江戸屋横町に入ると、木戸孝允旧宅と青木周弼旧宅が並ぶ。共にシルバーガイドが常駐して案内をしてくれることになっているようだが、いることはいるのだが、そうやる気はないようだった。青木は蘭方医を学び、敬親によって藩医に召し上げられた。研蔵は周弼の実弟で、同じ医道を歩み、のち周弼の養子となる。また厚狭郡埴生村の医者の子で、明倫館でその才能を見込まれ、二〇歳で研蔵の養子となった周蔵も、ここに住んだが、のち外相として条約改正に当たり、功績を残した。南のはずれに近い円政寺には「高杉伊藤両公幼年勉学之所　二孝子祈願之金毘羅社」という表示が出ていた。「二孝子」というのは前日、最初に見た碑にあったものである。もう一度、慶安橋筋を進み、中程に「晋作広場」というのがあるので、何かあるのかと行ってみたが何もない。案内図には、その北側が志賀義雄旧宅跡とあったが、碑も表示もなく、確認できなかった。

「萩城城下町」を後に、市役所をめざしたが、道を間違えたらしく、萩工業高校が右手に見える藍場川沿いを走っていた。予定はなかったが、そのまま藍場川に沿って行くと、「井上剣花坊誕生地」があるはずであった。特にその方面に関心があるわけではないが、既に山口県内の何ヶ所かで剣花坊の句碑を見ており、確か晩年は鎌倉で過ごしたということで、気にはなっていた。本名は幸一といい（一八七〇～一九三四）、俳句の正岡子規に対し、新川柳の剣花坊と称されたという。夫人も同じ道を歩み、鎌倉の建長寺に夫妻の墓があるらしい。碑には「何よりも母の乳房は甘かりし」の句が見られた。

藍場川から分かれて北に向かうと、正面に市役所の側面が見えた。観光課に行って資料をいくらか手に入れる。「萩温泉郷」のパンフがあり、狭い市内にも温泉付きの宿が数件あるのが分かった。部屋が取れれば、もう一泊していこうと、萩本陣を選んで電話する。二食付き一万四千円で予約。

国道を挟んで向かい側が明倫小学校で、藩校明倫館跡であった。この地に明倫館が移されたのは一三代藩主敬親の時で、一八四六（弘化三）年に再建の意向を明らかにし、一二月に幕府に届け出ている。起工式が翌年一二月、一八四九（嘉永二）年二月に落成した。

最後に寺町地区を回り、端坊鐘楼、常念寺表門などを見る。松林山端坊は毛利輝元によって一六〇八（慶長一三）年に創建され、鐘楼は三代吉就が一六八六（貞享三）年の初入国に当たり、時の鐘として寄進したという。一五三二（天文元）年の創建と伝えられる長栄山常念寺には輝元が萩築城前に宿舎として入った。表門は聚楽第の裏門だったものを秀吉から与えられ、伏見の毛利邸に移築してあったが、この縁で一六三三（寛永一〇）年に寄進したという。京都の建物が本州のはずれ、萩にまで移動されていようとは、驚きである。

駅のレンタル屋に自転車を戻して、ちょうど三時半。以上で市内見学を終え、タクシーでいったんホテルオレンジに寄り、預けた荷物を受け取り、昼に予約した萩本陣に入る。松陰神社を右手に見て、左手の山の中腹に建てられた大きなホテルだった。案内された五一六号室は十畳ほどで、窓から萩の町を見渡せる部屋であった。紅葉谷露天風呂は山腹からボーリングして地下二千メートルから源泉を得ているという。入浴するためにはモノレールで登らなければならない。上下二ヶ所に露天風呂が設けられており、下の方が男性用で、萩の夜景が眺められた。上の女性用は谷間に造られており、何も見られなかった様である。山頂は展望台となっており、恐竜の大型模

型や遊具などが置かれて、ホテルの反対側からも登って来られるモノレールがあって使われていたというが、今は利用者も減り動いていない。露天風呂からは湯冷ましに歩いて降る客もいる。また露天では石鹸やシャンプーは使えないので、内風呂の妙徳温泉が利用できる。

八月六日（土）

八時五〇分、タクシーでホテルを出、駅へ行く前に、市外から少し離れた萩反射炉へ回ってもらう。運転手もあるのは知っていたが来たことはないという。一八五八（安政五）年に建造されたもので、現存するのはこれと伊豆韮山の二基だけらしい。

東萩駅から九時一〇分発のバス「特急はぎ号」で新山口へ向かう。料金は一九七〇円。新山口着が一〇時二〇分頃。一〇時四五分発の「のぞみ一七六号」で、新横浜に着いたのが午後三時八分。

京浜歴史科学研究会入会案内

京浜歴史科学研究会は、次のような活動を行っています。

◎「『神奈川県史』を学ぶ会」―毎月一回、原則として第一土曜日の午後に、以下の学習会を実施しています。

①「幕末開港編」では、横須賀史学研究会編『浦賀奉行所関係史料　新訂臼井家文書』第四巻を読んでいます。

②「大正・昭和編」では、横浜開港資料館編『佐久間権蔵日記』第五巻を読んでいます。

◎『京浜歴科研会報』―毎月一回発行して、会員にお送りしています。研究会の記録や書評などが掲載されています。

◎『京浜歴科研年報』―毎年一回発行して、会員にお送りしています。会員の論文などが掲載されています。

◎「歴史を歩く会」―年二回、春と秋の日曜日に実施しています。

◎「集中研究会」―年二回、春と夏に研究文献を学習する会を実施しています。

京浜歴史科学研究会は、どなたでも参加できますので、ぜひ御入会下さい。御問い合わせは、左記事務局まで御願いします。入会を御希望の方は、事務局へ申し込まれるか、左記郵便振替を御利用下さい。年会費は、三〇〇〇円となっております。

【連絡先】　京浜歴史科学研究会事務局
〒二二三―〇〇〇六
横浜市港南区芹が谷五―五九―一二　大湖賢一方
電話　〇四五―八二五―三七三六
郵便振替口座　〇〇二七〇―八―一五五三五